自己のなかに脳はどのように位置づけられるのか

――精神科薬物療法経験者の語りを事例として――

東京大学大学院　櫛原克哉

1 目的

本報告の目的は、思考や感情、心の源であると同時に、調整やコントロールの対象にもなりうる「脳」を、社会学的自己のなかにどのように位置づけられるのかを経験的に考察することにある。近年では「神経化学的自己（neurochemical selves）」（Rose 2003）や「脳的主体（cerebral subject）」（Ortega 2009）のように、脳を基軸とする自己論が展開されている。また、自己と脳の関連性について扱った事例研究として、うつ病患者の自己観を明らかにした欧米の研究が蓄積されている（Stepnisky 2006 など）。これらの事例研究に共通する顕著なテーマとして、「自己と脳の分離」という自己理解様式があり、そのなかでは向精神薬の服用を通じて能動的に心身の状態をコントロールする「自己」と、生物医学的なコントロール対象としての「脳」に分離するプロセスが生じることが、数多く報告されてきた。以上の論点を踏まえたうえで本報告は、日本の精神科薬物療法の経験者の語りを事例として、人びとが脳をどのように捉えているのかを検討する。

2 方法

そこで、医療機関で脳に作用する医薬品（向精神薬）の処方を受けた経験のある 30 名の人びとを対象としたインタビュー調査を実施した。インタビュー内容として、彼らが脳をどのように捉えているか、特に心身の問題（心の病）と脳の関連性、治療的介入の対象としての脳といったテーマを中心に聞き取りを行なった。

3 結果

分析の結果、本調査では「自己と脳の分離」の傾向はほとんど確認されなかった。かわりに顕著だったのは、患者が心身の問題を脳という一つの対象に収斂させずに、断片的な症状として捉える「離散」の傾向と、何らかの介入を想定する場合でも、脳ではなく心の問題を想定する「凝集」の傾向であった。

4 結論

以上から、本調査では「離散」と「凝集」を、人びとが自身の脳を解釈するための類型として提示したうえで、日本の精神科患者が「自己と脳の分離」というよりも「自己と心の分離」を中心に自己を捉える傾向を明らかにした。

文献

Ortega, F., 2009, “The Cerebral Subject and the Challenge of Neurodiversity,” Biosocieties, 4: 425-445.

Rose, N., 2003, “Neurochemical Selves,” *Society*, 41: 46-59.

Stepnisky, J. N., 2006, “Narrative and Selfhood in the Antidepressant Era,” *Dissertation submitted to the Faculty of the Graduate School of the University of Maryland*.